

白根大輔 (IMADRジュネーブ国連事務所)

7月7日から24日まで2週間半に渡りスリランカを訪れた。IMADR 理事長、ニマルカ・フェルナンドの要請に基づくもので、昨年(2009年)5月の内戦終了後から新たな局面を迎えた民族問題や人権活動家・ジャーナリストの弾圧、国内避難民の状況、中央高地や南部のプランテーションで働くインド系タミール人の状況、女性の直面する問題など、スリランカの「今」についてなるべく多くの地を訪れ、その状況を直に目にし、またなるべく多くの人に会い、草の根の活動家や当事者とIMADRジュネーブ事務所のつながりを構築・強化するというのが主な目的だった。コロンボをはじめ、南西部ニガンボ、南部のゴール、中央高地のキャンディ、東部トリンコモリー、北部ジャフナなどの地域を訪れ、現地NGOや当事者と会い、複数のプランテーションや国内避難民キャンプを視察した。2週間半という限られた時間の中でできるだけ広範に動けた半面、スリランカという国のほんの一部を見たに過ぎず、訪れた地、出会った人びとと十分な時間を過ごせたわけではなかった。しかし、今後の活動を考えればその基盤となる貴重な経験ができ、これからさらに発展させていけるつながりを作れたと思っている。ここではその一部、特に国内避難民の状況について報告したい。

多様な避難民キャンプ

スリランカの国内避難民(IDP)と一概に言っても、80年代後半から90年代前半に避難民となったいわゆる「Old IDP」(編注:古いIDP)と呼ばれる人びともいれば、内戦の終盤2006年以降、激しい戦闘地となった北東部からの「New IDP」(新しいIDP)と呼ばれる人もいる。またタミール・イーラム解放の虎(LTTE)支配下に東部から迫害されたムスリム避難民もいる。避難民の暮らす「キャンプ」も多様であり、いわゆる「避難民キャンプ」もあれば国際社会からの圧力により再定住プロセスを開始したスリランカ政府が新たに作った「居住地キャンプ」もある。荒野の中にぽつんと存在するキャンプもあれば村や町の一角に壁で仕切られたものもある。「福祉センター」というカテゴリーのキャンプもある。これら多様なキャンプは無数に存在し規模や環境も異なったものとなっている。同じキャンプに長年暮らし続けている人もいればさまざまなキャンプを移動している人もいる。これらキャンプのすべてが政府や軍関係

者以外の人に開かれているわけではない。特にNGOや外国人のアクセスは多くの場合極端に制限されている。今回は東部トリンコモリー近郊で2つ、北部ジャフナ近郊で2つ、合計4つのキャンプを訪れた。東部のものはそれぞれ560世帯と230世帯が2006年から2007年頃から暮らしており、北部のものはいわゆる「Old」キャンプで、それぞれ約30世帯が1990年頃から暮らしている。

キャンプ内の暮らし

食料は主に国連世界食糧計画(WFP)により米、豆、小麦、砂糖、時には油が提供されていた。飲料水は政府によりタンクで供給されていたものの、特に乾季などその量が常に十分であるというわけではなく、それ以外の生活用水の源となっていたキャンプ内の井戸は汚染が激しいときもあった。居住施設は簡易な小屋やビニールシートを使ったテントなどで、トイレは共同、排水や排泄処理が整っている場合は少なく、トイレのすぐ隣のテントに住む家族は汚臭がひどくて耐えられないと言っていた。教育・医療施設への距離は近いところで1キロ程度、遠いところで10キロというものだった。それぞれのキャンプで避難民のリーダーたちやいくつかの家族から話を聞いた。それまでの家と生活を奪われ、半強制的にまったく別の土地へ移動させられ、いつまでそれが続くのか分からないままキャンプでの生活を余儀なくされている。多くの人の故郷は、地雷の存在や政府によって高度セキュリティ地域と指定されているために未だに一般人の侵入・居住は許されていない。一部の人の故郷はスリランカ政府により空港が建設されていたり、他国の政府に投資と工場建設の目的で譲渡されてしまったという。当初3ヶ月限りで約束されたキャンプ生活が何もないまま5年続いている



スリランカ地図



東部に行くときに筆者が乗ったブローラ機



キャンプの人たちと 左端筆者

とか、再定住プロセスと言われながら、実際には別のキャンプへ移動しての生活が続いているとリーダーたちは語っていた。今年行なわれた選挙の前には何人かの政治家や大臣も訪れ、いろいろと約束していったが、そのどれも守られていないという声も聞いた。それまでの家計の稼ぎ主、唯一の家族であった夫を失った未亡人はこれからどうしていいのか分からないと絶望的に語っていた。

厳重なキャンプ地へのアクセス

当初、「New」キャンプ訪問の許可は出にくいかもしれないが、少しでも現地状況を見たいという希望を持って防衛省に陸路での北部訪問の許可を申請した。結局激しい戦闘地となった北部地域のキリノッチ、マナー、ムラッティヴや巨大キャンプのあるヴァヴニア地域への訪問許可は出ることはなく、代わりに空軍の小型プロペラ機で、スリランカ最北部のジャフナにのみ入ることができた。もともと NGO の活動は制限されている中、特に国連事務総長の諮問機関設置以降さらに NGO や外国人への移動や活動の制限が強まった感がある。

危険と隣り合わせの生活

すでに多くの活動家や学生、ジャーナリストなどが真相が解明されないまま殺害されたり行方不明になっている。現地 NGO 関係者の中にも密通者がいると言われており、少しでも反政府的と「思われる」「感じられる」要素が活動に含まれれば脅迫や誘拐、時には殺害につながる危険性がある。そんな状況では恒常的に疑心暗鬼が生じることも少なくなく、NGO 間の効果的な情報共有や協力も困難となる。実際に比較的多くのキャンプにアクセスのある団体・個人の活動も「慈善支援活動」という枠組みのものと現物支給のみ許可されている場合が多く、キャパシティビルディング（能力構築）やエンパワーメント、ドキュメンテーション（記録と文書化）などの活動は厳しく制限されている。このような制限の多い

キャンプほどそこでの避難

民の生活は過酷なものであるという印象を受けた。北部のあるキャンプでは支援食料の中に大量の芋虫が混ざっていたり、乾燥気候の地域で暑さは酷く水源も乏しいという話だ。激しい戦闘と爆撃、報復襲撃やレイプを経験し、家族や友人を失った人びとの中には、激しいトラウマを負っている人も多い。そんな避難民に対して精神的ケアは提供されず、それを提供できる第三者のアクセスは許可されていない。食料や水が不足している上、キャンプ内の治安維持機能も整っていないため、今日を生き延びるために、あるいは極限状況の中での犯罪も多いと言う。時にはその状況の深刻さや物資の不足から、現場でキャンプを管理する軍関係者自身が NGO に対し早急な支援を要請するケースもあると聞いた。夫や家族を失った女性も多く、特に深刻な状況に直面している。少量の米やミルクを得るため、生き残るために残された最終選択肢として、軍関係者を相手に性的行為を提供するケースも増えているという。そういった状況を利用した集団レイプ事件も起きている。売春は違法であり、こういったケースでは裁判を起こしても、自発的要素が含まれるため、女性が犯罪者扱いをされ、必要な救済を得ることは困難であるとも聞いた。6 万人以上が収容されているある巨大キャンプには、4 千人以上の孤児が特別な支援や教育提供もないまま収容されているという。

内戦は終結したものの

2009 年 5 月に 30 年続いた内戦が政府軍による強行軍事作戦により一応の終結を遂げた。一部の国内避難民はもとの居住地へ帰還したものの、多くの問題は未解決のままである。コロンボへ向かう飛行機で、コロンボの街中で、また中央高地や南部で出会った多くの人は、内戦が終わりようやくスリランカの状況はよくなったと語ってくれた。おおびらな武力衝突はなくなり、確かに多くの人びとにとって自爆テロや時限爆弾、その他の攻撃により突然に命を失う危険はなくなったと言っているのだろう。だからといってスリランカに「平和」が訪れたという実感はまったく得られなかった。むしろその逆で、力の均衡が崩れ、政府・大統領が強大すぎる権力を握るなか、少数マイノリティや社会的弱者、抑圧される側の状況は、ある意味においてより深刻になったのではないかと思う。

(しらね だいすけ)



ジャフナ近郊の古いキャンプ